



北朝鮮、平壤郊外で起こった ありふれた殺人事件の物語

東 えりか

Erika Azuma

日本の隣国でありながら内情を窺い
知ることのできない朝鮮民主主義人民
共和国、通称・北朝鮮。ここ数年、韓
国との融和政策などから、少しずつ国
情を垣間見る機会も増えてきた。だが
それも首都平壤が中心。地方の人々の
苦しい暮らしと厳しい統制の様子は

は脱北者の報告からしか知ることがな
かった。

ストーリーテラーとして人気の高い
作家、松岡圭祐の新刊は、その北朝鮮
の平壤郊外で起こった殺人事件を追っ
たミステリーである。

それも、読んでいる間に何度も何度も

TITLE

出身成分

松岡圭祐

KADOKAWA 定価(本体1,600円+税)

も驚きの声を上げてしまうほど先が見えない物語だ。誰が善人で誰が悪人か。翻弄され、裏切られて、混乱の果てにどおり着いたのは、北朝鮮でなければありえない結末だった。

一読して全くの創作ではないことはわかる。これは多くの脱北者の証言を基にした、現実に近い出来事なのだ。

平壤郊外で人民保安省保安署員として働く四十一歳のクム・アンサノは、十一年前に平壤から近い价川市で起こった殺人・強姦事件の再捜査を命じられた。全保安署に、疑わしき過去の事例を洗いなおすよう通達があったからだ。この国では、事件の被疑者は逮捕されず、人民保安省か国家保衛省による強制連行ののち、名ばかりの裁判を受け教化所か管理所へ収容されていた。だが人権意識が人々に芽生え始め、政府も国際社会から圧力を受けるようになったため、水面下で再調査が行わ

れ始めていた。

アンサノの担当は四十五歳男性ベク・グアンホの殺人事件だ。十七歳の娘チヨヒは強姦されて倒れていた。犯人として収容されているのは第一発見者の男イ・ベオク。アンサノはベオクに面会するも確証は得られない。

事件が起こった价川市の現場を捜査し、生き残ったチヨヒが叔父夫婦に引き取られた田舎にも足を運ぶが、強姦されたことで軽蔑すべき存在とされ、ひどい差別を受けていた。

チヨヒは目鼻立ちの整った女性で、二十八歳のわりには言葉遣いが拙く、思考も同様のような。その姿にアンサノはなぜか惹かれた。

事件のことを尋ねると、自分を強姦したのは殺された父、グアンホという。ではその父を殺したのはいつたい誰なのか。アンサノは捜査の杜撰さ、記録のあいまいさ、そして身分差別の

凄まじさを目の当たりにしていく。

タイトルの「出身成分」とは北朝鮮特有の階層制度であり、その階層自体を表す言葉である。家系を三代前まで遡り「核心階層」「動揺階層」「敵対階層」に分類される。

一番上である「核心階層」は朝鮮労働党員や抗日戦争での犠牲者の遺族などで国に忠誠を尽くす者であり、特権階級である。

最下位の「敵対階層」は国に対する反逆の意志ありとして政府の監視下に置かれ、高等教育機関への進学は認められない。中に位置する「動揺階層」も監視下にあるが体制への「従順度」が高ければ優遇措置が受けられる。都市部にすむことができるのは基本、核心階層だけだといわれている。この事件の根底に潜んでいたのは出身成分による差別であった。

アンサノの父親クム・ドウジンを保

安署の嘱託医師で「核心階層」であった。この国では医師の身分は必ずしも高くないが、それでも父の出身成分を継いでアンサノも核心階層だ。だが父は担当していた朝鮮労働党幹部の暗殺容疑で獄中の人となっていた。

調査を進めるうちに、事件前後にチヨヒの家近くに謎の浮浪者がいたことが判明した。この男が事件のカギを握っている。アンサノは注意深く足取りを追いつ始めた。事実をつなぎ合わせた推理の末、真実に近づいたと確信したアンサノに衝撃の事実がつけられる。

鉄のカーテンに遮られ、国連でも問題視され続けている北朝鮮。しかし暮らしているのは普通の人間であり、幸せになりたいと願うのはどこの国でも一緒だ。では幸せはどこにあるのか。驚愕のラストシーンまで巻を措く能わずの傑作である。